

## はじめに

本資料は、1930年代インドネシア（当時は蘭領東インド、蘭印）から日本に留学（東京慈恵会医科大学、1934年4月～1939年3月、正規学位取得）した最初期の留学生マフユディン・ガウス（Mahjudin Gaus, 1910-1991）氏の回想録を訳出したものである。ガウス氏は、1980年代前半、当時医師として日本から帰国以来半世紀近く生活の拠点を置いていたシンガポールでこの回想録を綴っていた。編訳者は、いたるところに手書きの書き込みがなされたタイプ打ち英文原稿（随所にインドネシア語での書き込みがある）をガウス氏より頂戴し、また同氏から出来れば日本で何らかの形で刊行していただきたいとの依頼を受けた。それは1983年夏、編訳者がシンガポールのご自宅でガウス氏から長時間にわたりインタビューをさせていただいた折のことであった。なおガウス氏の所在を確認し、最初のコンタクトをとってくれたのは、「シンガポール華人と辛亥革命」をテーマに早稲田大学文学部の卒業論文を準備中の中野（現 梅田）美由紀さんである。

それ以来30年の歳月が経ってしまったが、このほどようやく早稲田大学アジア太平洋研究センターの研究資料シリーズの1冊として公刊できることは望外の幸せである。推薦の労をとっていただいた村嶋英治教授に改めて御礼を申し上げたい。またセンター事務所の藤井久美子さんには、事務手続きに際し何かとご面倒をおかけした。（株）国際文献印刷社の高田恭仁子さんには、細部にわたる丁寧な校正をしていただいた。ガウス氏の母校、慈恵会医科大学の学務課、同窓会からも貴重な情報をいただいた。あわせて謝意を表したい。

公刊に際し、今は亡きガウス氏に深甚の謝意を表させていただくとともに心からのご冥福をお祈りする次第である。なお本資料においては各章の題目、小見出し等を適宜付すとともに、ガウス氏の戦後1950年代以降、とりわけシンガポール市民権を取得し安定した医師生活を営んでいた時期についての回想部分は省略させていただいたことを付記しておきたい。また明らかな事実関係の誤りについては、編訳者の判断で修正を施させていただいた。

## 解 説

今日でこそ、インドネシアをはじめ東南アジア諸国からの留学生が日本の高等教育機関で学ぶことはごくありふれたことである。またそのなかで日本政府・公的諸機関、あるいは民間の奨学財団・企業等による様々な形での経済的支援が一決して十分とはいえないにせよ一整備されていることも周知の通りである。日本政府が東南アジアからの留学生受け入れに積極的に取り組むようになったのは、1930年代半ば官民において東南アジア（当時は南方あるいは南洋と呼称）への政治的、経済的関心が一定の高まりを見せた時期のことである。とりわけ1935年12月、外務省管轄下に日本語教育・留学生受け入れ機関として財団法人国際学友会が発足してからのことである。

それ以前の日本では、20世紀初頭、日露戦争後のベトナム知識青年による東遊運動の悲劇的な帰結が象徴するように、民族意識に目覚めた東南アジアからの留学生は欧米列強との協調関係を重視した日本の政府当局から見ると、いわば「喉元に刺さった魚の小骨」的な存

在でもあった。しかしながら、満州事変を契機とする日本の国際連盟からの脱退（1933年3月）以降、次第に「アジア回帰」を掲げるようになった日本にとって、欧米列強の植民地（タイ国を除く）であった東南アジア各地からの留学生を受け入れることは、きわめて重要な対外的宣伝効果を持つもの（今日的にいえばソフトパワー）と認識された。

とはいうものの、日本社会の急速な国家主義化の中で言論・思想の統制が厳しくなるなか、これまで文化的には希薄な関係しかなかった、そして反植民地主義の高まりつつあった東南アジアから、知識青年が留学のために相次いで来日することは、少なくとも青年層とりわけ学生の思想動向に過敏になっていた公安当局から見ると一定の警戒を要するものとみなされた。

たとえば日本が国際連盟から脱退したまさにその年に日本に留学した、本回想録の著者マフディン・ガウス氏、さらにはマジッド・ウスマン氏（明治大学）という2人の西スマトラ出身留学生の動静を1933（昭和8）年1月の来日直後から追っていた警察当局は、2人の来日を共産主義運動との関連で理解していたことが、以下の記録からも明らかである。

「何れも南洋土人中思想的に覚醒したる智識階級に属するものなるが（中略）最近蘭領印度諸島に於ける民族運動は漸次濃厚となりて従て共産主義運動も其の間全島を通して次第に台頭し来り（中略）其の入京の目的及思想関係等に関しては嚴重注意内査中有之」（警視総監藤沼庄平発内務大臣山本達雄他宛「蘭領東印度留学生渡来ニ関スル件」1933年1月19日、外務省外交史料館所蔵資料）。

「ガウス回想録」は、インドネシアで最大の母系性社会・男子の移住伝統で知られる西スマトラ・ミナンカバウ社会で過ごした少年時代、首都バタビアでの高等学校生活・民族主義運動とのかかわり、1930年代半ば以降の日本留学時代と医学学位取得後のシンガポールでの医師開業、戦時期シンガポールでの日本軍政当局との関係、そして永住の地となったその地での戦後の苦闘時代、とりわけ同地におけるインドネシア独立支援の実情を率直な筆致でいきいきと書き綴った貴重な記録である。

なお編訳者は「ガウス回想録」を踏まえつつ戦前期日本におけるインドネシア留学生の民族主義運動（その指導者の1人がガウス氏）について、「サレカット・インドネシア考—在日留学生会と日本—」としてまとめたことがある（『昭和期日本とインドネシア』勁草書房、1985年、第13章を参照）。また主として戦時期インドネシア留学生を対象としているが、ガウス氏と同時代の戦前・戦中期留学生からの貴重なインタビュー記録を盛り込んだ倉沢愛子著『南方特別留学生が見た戦時下の日本人』草思社、1997年も有益な先行研究である。インドネシアにおいては、戦前・戦中・戦後（換言すればオランダ植民地期、日本軍占領期、そして独立後）に日本に学んだ元留学生たちの回想記録集（*Suka Duka Pelajar Indonesia di Jepang: Sekitar Perang Pasifik 1942-45*, Jakarta: C. V. Antarkarya, 1991、『インドネシア日本留学生の喜びと悲しみ—太平洋戦争前後』）が、本「ガウス回想録」とも関連した資料的な価値の高い文献となっている。